

## 一緒にトランポリンを跳ぶことの意味について

山田 陽子  
(愛育養護学校)

はじめに

K夫(幼稚園6歳)が6月のある日突然トランポリンの上でおんぶを要求してきた。それまでのK夫は学校の行き帰りに母親におんぶされてはいるものの保育者におんぶを要求した事はなく、トランポリンにも一人で乗り保育者を誘う事は一度もなかった。本研究では4月からのK夫と担任保育者の一人である私とのかかわりの実際を述べてK夫の行為についての理解を試み、K夫にとって保育者と一緒にトランポリンを跳ぶ事の意味について考えてみたい。

K夫と私のかかわりの実際について

[4月～5月]登校するとすぐに遊び出す。固定遊具の高い所に登ったり、大好きな風の吹く日は風によって校庭を走り廻ったりする活動的な遊びが多い。水遊びも好きで手洗い場で玩具を洗って拭いて棚に納めたり、石鹸を泡だてて自分や私の頬に塗り付けたりして遊んでいる。玩具を洗う時水道の蛇口をひねって「洗って。」とかタオルを渡して「拭いて」と要求してくる。その際手や顔を含めた私を必要としているというよりも手や顔という部分のみを必要としているように感じられる。[6月～]毎朝登校するとすぐにトランポリンの上でおんぶを要求する。初めに母親と跳ぶこともある。顔とお腹とを私に密着させ腕は脇の下から胸に廻し乳首を触ったりする。高く跳ぶと落ちるような姿勢なので穏やかに跳ぶ事の要求でもありとみてゆっくり揺らす。1時間から2時間位で、満足すると降りて一人で遊び出す。登校中に母親に叱られたとか風邪気味だとか心身の調子が悪い時に時間が長かった。跳んでいる途中ですぐに済む用事ができた時、訳を話しておぶったまま降りて済ませようとするので泣いて拒み、担任同士で交替するのは良いがそれ以外の保育者との交替も嫌がる。トランポリン以外の場所でおんぶを要求する事はなく一緒に過ごす保育者も担任でなくてよい。背中で「ポーラ」「この番組はカゴメの提供でお送りしました。」等と呟くので、その言葉を繰り返して伝えると次に違う言葉を言う。間の取り方からこちらが真似るのを待っていると感じる。一人で跳ぶ事もあるが身軽で飛ぶように跳んでおり着地の音も静かである。[6月後半～]おんぶされて肩に捕まり手足に力を入れて頭を立て高く跳んでも大丈夫な姿勢を

取り、元気に跳ぶ事を要求しているのが伝わる。初めの頃私が一度に元気に跳ぶとK夫が想像していた跳び方と大きく違ったらしく、スッと降りて他の保育者の手を引いた事があった。その後穏やかに跳ぶのと元気に跳ぶのを交互に要求するようになる。調子の悪い時には穏やかな跳び方を良い時には元気な跳び方を要求する回数が多かった。黙って跳んでいると「明日の風に」とCMの歌を途中まで歌って私に歌うように要求する。K夫が要求するCMの歌は大人も口ずさみたくなるような歌で母親もそう感じているという。跳び方に合わせて音量を変えて歌う。悲しそうに泣きながら自分でCMを歌っている時がある。K夫の後からついて歌うと私の目を見ながら最後まで歌い、歌い終わると気持ちが落ち着いたように見える。[9月～]従来のおんぶは欠かせないものの仰向けになっておぶわれてみたり抱っこで手を脇から背中に廻して胸も顔も密着させたりする。誘う時に私の視線をしっかりと捉えて手を引く。担任以外の保育者にもおんぶされるようになる。おんぶをして高く跳び上がる際にK夫も背中でジャンプするようになり、時には声をたてて笑う。私も嬉しくなり一緒に笑うとますます活気づいてくる。更におんぶを早めに切り上げて一緒に跳ぶようになり互いに一緒に遊ぶことの楽しさを味わう時間が多くなる。例えば・両手を繋いで一緒に高く跳ぶ・片手を繋いで私を軸にしてトランポリンの端を歩いて廻る・私の背中に立ち上がる等。私の方から横抱きにして廻ったり寝転がっているK夫の足を持って跳んだりすると次から横抱きにされようとしたり寝転んで足を上げたりしてそれらの遊びを姿勢で要求してくる。一人で跳ぶ時に思い切り高く跳び着地の際故意に大きな音をたてる。周囲の人達とK夫自身に向けて「K夫ここにあり」と言わんばかりで存在感を感じさせる音である。ころんだり打ったりして痛い思いをした時に泣きながら私の腕や頬を噛もうとする。[11月～]おんぶが必ずしも最初でなくなり、出足から一人で跳ぶこともある。おんぶの場合は他に誰かが一緒に乗っていてもこちらが普段K夫と跳ぶ時のリズムを保とうと調整するので嫌がらないが、一人で跳ぶ際には自分で調整しなければならぬのが嫌いのようで、相手が降りるまで泣きながらも傍で待っていたりする。おんぶされな

がら「あっ本当だ。アサヒビールだ。」と言うので真似ると次々に会社名を当てはめて言う。途中聞き取れなくて間違えると会社名の所だけをもう一度伝えてくる。3～4回間違えると他に替える。[12月～]トランポリンで小学部の子供と保育者が一緒に跳んでいる所に乗り込み、保育者の後ろに廻り腰の所を握って一緒に跳んだりする。一人で楽しげに踊るような感じで跳んでいる。その動きがテス(紅茶缶)のCMに似ているので、K夫の跳んでいるリズムに合わせて歌うと笑顔を見せてくる。[1月～]冬休みに私が髪型を変えた為か始まってすぐは離れた所から見ていて寄りつこうとしない。4日目に通りすがりに私の腕に触れて行き5日目にトランポリンに誘われる。近くの保育者に「やっと私を思い出してくれたようです。」と言うと、K夫は私の顔を自分の方に向けて目を見てニコツとする。小学部の子供達がトランポリンに乗っていても自分が乗りたい時には一緒に乗り、彼等の跳び方やリズムに合わせて跳んでいる。途中で背中を押されて降りるように要求されると一度は降りるが頃合をみてまた乗って行く。手を繋いで一緒に跳んでいる時に時々高くジャンプしているので「1・2の3」とかけ声をかけて高く持ち上げると面白かったらしく次から「1・2の3」と言って要求する。子供にひっかかれたり電車の玩具を頭に乘せて遊んでいる間に車輪が髪の毛に絡みついたりして痛い思いをすると「痛い。」と痛そうな表情をして鏡にその表情を写しに行き、それから「おんぶしてって言うてるでしょう。」と言ってトランポリンでのおんぶを要求ししばらく跳ぶと元の表情に戻り噛もうとはしない。「いやな風邪には」と薬のCMを近くの保育者が歌うと大声で「あー。」と言ってトランポリンから降りてその人にしがみついでいく。嬉しそうだったのでスキップしながら歌うと追いかけてきてつねる。つねられたらやめてK夫が私から離れると続きを歌い出すというのを繰り返して追いかけてこくなる。母親に話すとそのCMは自分で歌うのはいいけれど他人が歌うのは嫌らしい。おんぶしている時にK夫の好きだったCMを歌うと両手で私の口を塞いで「ダメ。」と言う。

#### K夫の行為に対する私の理解

おんぶはK夫にとって母親との繋がりを象徴するものであり、2ヵ月の生活を共にする中で私に対して母親に感じるような繋がりを徐々に感じていて、それが同じ形で表面に出てきたものと思われる。またK夫はお腹や手足はもとより触感受性が強いとされる顔までも無防備で余り意識の及ばない私の背中に密着させる

という触れ合いの中で、私の身体を自分の身体の延長のように感じての一体感と自分を侵されることはないという安定感を持ったのではないだろうか。おんぶというのは受け身のイメージがあるが主導権はK夫の側にあった。トランポリンはK夫にとってくつろげる安心な空間であるらしく、遊びの合間に寝転がって過ごす姿も見られた。トランポリンの跳び方をK夫は手足や顔の位置で要求してきたが、私と同じ動きをほぼ同時に体験することを楽しんでいただようだ。そしてまたその楽しさの共有がK夫の笑い声に表れている。跳び方の要求は物の要求とは異なりK夫の期待と完全に一致する事はないのでお互いが歩み寄る形になるが、K夫はまず歩み寄る幅の少ない穏やかな跳び方を要求する中で私に馴染んでから段階をおってダイナミックな動きを要求するようになっていった。K夫はCMの歌や言葉が好きである。ある時背中で鉄腕アトムを歌い出した。CM以外の歌を聞いたのは初めてで帰りに母親に話すとミロのCMに使われていると言う。その時少しがっかりしている気持ちからCMに対する偏見を持っている自分に気づいた。K夫にとってのCMは悲しい時に慰めてくれたり、楽しさを倍にしてくれるものであり、私とのやりとりの仲立ちをしてくれるものである。K夫の噛む行為は行為そのものの善し悪しの価値判断はさておき、痛みに伴う悲しみや怒りの感情だけでなく痛みそのものをその場で丸ごと私に伝達して、外部に追いやるような形で自分の気持ちに安定感を取り戻そうとしているようにみえる。痛みを自分で抱え込み表情や泣き声及び「痛い。」という言葉と結びつけて表現し、それを私に伝え共感されていると感じ得た時噛まなくても自分の感情を統制することができるようになったと考える。これまでは他者と視線を合わせる必要性を感じなかったと思われるK夫が視線で圧迫感を与えたくないと思っていた私に彼の方から視線を向けてくる。目で語りかけてくるのが伝わる。

#### おわりに

K夫が私と一緒にトランポリンを跳ぶ過程での身体や言葉等を使った様々な行為を私とのかかわりにおいて理解していく時、それらが私に向けての表現であると捉えられる。私がおんぶしている間肉体的に疲れても気持ちは心地良く少しも苦にならなかったのは、K夫と私が通じあっているという手応えを感じていたからに他ならない。このように行為を表現として用いて相手に示し、且つ相手の表現を読み取りながら楽しい体験や安定する体験を共有することはK夫が他者へ心に向けて生活して行こうとする原動力になると考える。